

静岡大学ガムラン演奏団の活動：
地域への発信とつながり

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子, 新井, 和康 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7188

静岡大学ガムラン演奏団の活動

—地域への発信とつながり—

音楽教育講座 小西 潤子 新井 和康

はじめに

平成 19 年度、大阪音楽大学より静岡大学キャンパスミュージアムにバリ・ガムランが寄贈されたこときっかけに、静岡大学ガムラン演奏団・ナーダ・ブラーマ・チャルヤ（サンスクリット語による「学徒による」という意味）が結成された。そして、平成 20 年 11 月、キャンパスミュージアム特別展で展示およびワークショップを行い、平成 21 年度には静岡大学創立 60 周年記念事業「静大フェスタ」、焼津市で開催された国民文化祭に参加した。平成 22 年度は、静岡大学教育学部附属特別支援学校中学部生徒へのワークショップ、大学女性協会静岡大会でのアトラクション出演、メンバーの技能向上のための講習会、県内西部地区音楽教諭有志からなる「音の会」へのワークショップを実施した。以下、各イベントに関して報告する。

1. 静岡大学教育学部附属特別支援学校中学部校外学習「静大に行こう」でのガムラン体験ワークショップ

平成 22（2010）年 4 月 20 日（火）8：30～15：00 まで、教育学部附属特別支援学校中学部の 15 名の生徒が、教員 9 名と共に静岡キャンパスを訪問しました。その際、10：55～11：40 には、静岡大学理学部 B 棟 1 階キャンパスミュージアム実習室にて、ガムラン演奏を体験した。実施にあたっては、静岡大学学生 5 名が参加協力した。特別支援学校とのガムランを使った交流は初めてのことであったため、事前に香野毅・特別支援教育准教授の指導を受け、新井が実施案を作成した（参考資料参照）。



写真 1 バリ島文化の紹介

まず、教育学研究科および教育学部の音楽専攻、特別支援教育専攻の学生とともに、インドネシア・バリ島がどのような場所であるのか、写真を見てイメージした。そして、色鮮やかなガムランを目の当たりにし、日ごろなじみのある木琴や鉄琴の音色との違いを聴き比べました。生徒たちは、「全然違う～！」とガムラン独特の響きを感じ、表現した。

参考資料：ガムラン体験ワークショップ実施案 (作成：新井)

展開	生徒の活動内容	留意点、学生の行動
導入 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ガムランの周囲を囲むように座る (?) ・ガムランがあるバリ島とはどんな場所か、写真を見せてイメージを持ってもらう ・ガムランとは何かをつかむ ・鉄琴・木琴とガムランの音色を聴く ・ガムランの奏法を見る ※鍵盤が並んでいる、たたいて音を出すことは同じなのに、装飾やバチの形、音色が違う ←既習の楽器と関連付けることで導入を円滑にする ・2人1組で1つの楽器についてもらう (本実施案の便宜上A、Bとする) 	<p>(学生内訳：進行1名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉄琴・木琴を見せる (類似点、相違点を感じてもらう) ・鉄琴のバチで、鉄琴・木琴・ガムランの両端の鍵盤をたたく (学生内訳：木琴1名、鉄琴1名、ガムラン2名) ・たたいて音を出すことは一緒だけど、実はガムランはバチが違うことを見せる ・以後、たたかない人はペアの人を見て学習 (学生内訳：進行以外は生徒を適宜支援) ・右手で持って、左手は (?) ・たたく鍵盤の場所は統一 (?)、いつせいにたたくか、好きにたたいて良いか
体験A (7分)	<ul style="list-style-type: none"> ・バチを持つ ・鍵盤をたたく 	
体験B (7分)	<ul style="list-style-type: none"> ・体験Aと同じ 	
合奏A (8分)	<ul style="list-style-type: none"> ・4つの鍵盤を使って曲 (便宜上) を演奏する 	<p>(学生内訳：進行1名、デモ1名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たたき始めの合図、身振り (?) で指示 (掛け声はサンハイ?) ・進展度を見て、8つの鍵盤をつかったものまで発展させる
合奏B (8分)	<ul style="list-style-type: none"> ・合奏Aと同じ 	
終了	<ul style="list-style-type: none"> ・他の楽器も体験? 	<ul style="list-style-type: none"> ・進度が予定より早ければ、他の楽器も体験してもらう (バチの持ち方、たたく位置などを注意)

※何をやる時間か (見る、聞く (聴く)、実践する) を明確にする

そして、ふたり一組になって交代で演奏体験をし、最後にガムラン音楽の特徴的なパターンを合奏した。はじめての音色と部屋一杯広がる大音量に、生徒たちは戸惑うことなく、熱中して演奏した。「交代してください」という学生からの指示に対して、「えっ、もう交代するの?!」と言った生徒もいた。とても初めてとは思えない演奏の出来栄えに、感動した。また、ガムランを演奏する生徒たちのキラキラ輝く目と笑顔がとて

も印象的であった。



写真 2 体験の様子①



写真 3 体験の様子②

(小西)

2. (社) 大学女性協会静岡大会でのアトラクション出演

本事業は、2009年7月2日に実施した「フーゴ・ティッチアーティ ヴァイオリン・リサイタル」(本報告書の別のレポート参照)に訪れた社団法人大学女性協会静岡支部長・鈴木キミエ氏より演奏の依頼を受けたものである。同協会は、正会員1176名の全国的な組織で、2010年5月9日ホテルアソシア静岡の会場には札幌、秋田、仙台、新潟、茨城、栃木、群馬、長野、東京、神奈川、静岡、愛知、金沢、福井、京都、奈良、大阪、神戸、岡山、広島、大分、熊本、福岡、長崎の24支部から171名が参加した。



写真 4 会場の様子



写真 5 熱心な観客

大学生を中心にガムランとその演奏のみならず、インドネシアやバリ島の文化も知っていただこうと企画を立てた。岐阜大学連合農学研究科に所属し静岡大学農学研究科に配属されているイケトウツト・ムジャ氏へのインタビューや同氏の協力を得て踊りの衣装の披露、委嘱作品《海辺にて》を作曲した小菅由加里氏のお話を交えた。さすがにバリ島を訪問したことのあるという観客が多くいたが、それでもガムランの演奏は好評であった。企

画そのものも工夫が必要であるが、今回のような外部での演奏会の場合、楽器運搬計画とその経費負担の問題が大きい。後者は主催者が負担したが、前者については会場の事前調査によって搬入・搬出経路を確保したり、それに伴う学生スタッフの確保をしたりという必要があった。この問題は、今後も考えていくべき課題である。

(小西)



写真 6 楽器の紹介をする



写真 7 踊りの衣装の披露



写真 8 演奏の様子①



写真 9 演奏の様子②

3. ガムラン講習会

静岡大学ガムラン演奏団にとっての課題の 1 つが、技の習得と次世代への継承である。2011 年 2 月 16 日 (水) 10:00~16:00 にバリ・ガムラン演奏団・ギター・クンチャナ主宰の小林江美氏を講師に招き、ガムラン演奏の基本 (たたき方や消音のコツやコテカン奏法など) の指導を受けた。小林氏にはあらかじめナーダ・ブラーマ・チャルヤによる演奏録画資料を送付し、どのようなレベルかを知っていただいた上で適切な課題をご用意していただいた。継続的にガムラン演奏に関わっている学生以外にも、今回初めて参加した学生もいた。



写真 10 ガンサ類の基本奏法

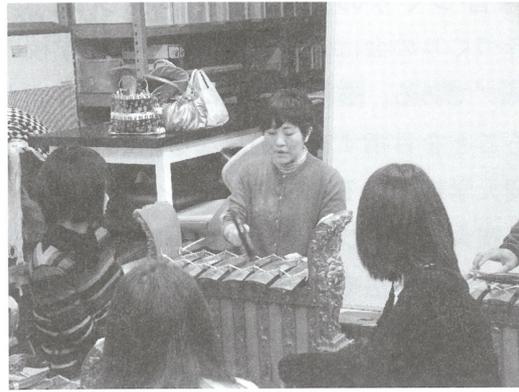


写真 11 入れ子構造の説明

小林氏は、まず旋律の基本となるガンサ類の奏法と演奏パターンを教授した。そのなかで、低音楽器から高音楽器までが順に音を埋め合わせるように成り立っているガムランの入れ子構造という音楽的特徴を理解させた。また、メモをとる学生に対しては、まずは身体で覚えることを優先するように指示した。

そして、順に使う楽器の種類を増やしていき、学生たちがひとつおりの楽器に触れるような工夫を行っていた。細かい奏法が求められたり、番いでお互いの息を感じ取る必要がある楽器があったりとそれぞれ特徴があるため、最終的にはそれぞれを得意とする学生が担当する楽器を自ずと決めていくことになった。



写真 12 パターンの組み合わせを教わる



写真 13 番いの息遣いが必要

さすがに1日の講習では、1曲をまるごと演奏できるほどの実力は身につかなかったものの、ガムランの特徴を知り、その演奏の可能性を理解するには十分な時間を過ごすことができた。小林氏からは、楽器のメンテナンスの問題を指摘された。特に、ガンサ類の青銅製板を結んでいる牛皮製紐が緩んでいて、楽器によっては残響音に影響を与えている。紐は太い釣り糸でも代用可能ということなので、取り替える必要がある。このように、演奏の技だけでなく、楽器メンテナンスの技も合わせて習得する必要があることがわかった。

(小西)

4. 音づくりの会・ワークショップ

音づくりの会は、県内西部の小・中学校の音楽科教諭およびそのOBから構成されるグループである。2～3ヶ月に一度集まり、さまざまな活動に参加することで音楽の幅を広げることを目指す有志からなる。2011年2月19日、ガムラン体験は初めてという8名が静岡大学理学部B棟1階キャンパスミュージアム実習室を訪れた。

静岡大学ガムラン演奏団からは、上記講習会に参加した学生のうち8名が参加し、覚えただけの奏法やリズム・パターンをわかりやすく音づくりの会の方々に実演を交えて解説した。日頃音楽に関わっている方々であるため、一般の方々とは比べ物にはならない上達度であった。とはいえ、入れ子構造をうまく使って演奏することなど同じ鍵盤でもピアノとは異なる奏法への戸惑いがあったのは否めない。



写真 14 リズムパターンに挑戦する



写真 15 学生とともに演奏する

終了後には、「大変楽しかった」という感想が聞かれた。一人では演奏できず、みんなが力を合わせて一つの音楽を作るガムランならではの体験は、音づくりの会の方々にとっても印象深かったようである。なかには、「学校に来ていただけないか？」という質問もあった。出前演奏に関しては、楽器運搬と演奏する学生の確保が最大の課題である。昨年度取材をしたジャワ・ガムラン演奏団ダルマ・ブダヤの場合には、主婦であるなど比較的時間の余裕のあるメンバーがいたり、主宰者自らが保有する大型の自動車で楽器運搬をしたりするなどの工夫をしていると聞いた。しかし、バリ・ガムランのゴング・クビヤールという大編成の楽器を運搬するとなると、個人では難しい。また、毎回のイベントに際しても、学生の数を集めるのは難しい。ガムランのよさが、そのまま演奏保持の難しさとなっているところである。すぐには解決できない問題であるが、そのときどきの状況によりベターな選択をしていくほかはないものと現時点では考えている。

(小西)